教育現場に負担、新常用漢字表

京都大人文科学研究所准教授　安岡　孝一

フォーラム京

文化審議会国語分科会の漢字小委員会は10月23日、常用漢字表の改正案を承認した。この改正案は、現行の常用漢字表1945字に196字を追加し5字を削除するもので、これで常用漢字は2136字となる。しかし、この2136字には旧国語審議会以来のしがらみがあって、字体を全体で統一できなかった。

一点か二点か混乱

たとえば、新しい常用漢字表にはしんにゅうを含む漢字が57字あるが、これらのうち「遡」「遜」「謎」の3字は、しんにゅうに点が二つある「辶」（二点しんにゅう）なのに対し、「違」「遺」「逸」など54字は「辶」（一点しんにゅう）だ。しかも、前者3字には角括弧に入った許容字体「遡」「遜」「謎」が付記されており、後者54字には丸括弧に入った康熙（こうき）字典体「逸」など6字が付記されている。なぜ、こんな変なことになってしまったのだろう。

新しい常用漢字表の字体を統一できなかった最大の原因は、旧国語審議会が2000（平成12）年12月に発表した表外漢字字体表にある。表外漢字字体表は、常用漢字以外の漢字に対してその標準字体を示したものだったが、その内容は旧字中心主義ともいうべきものだった。しんにゅうに関しても「遡」「遜」「逢」「謎」など、全て旧字風の二点しんにゅうが標準字体とされていた。

コンセンサス足かせ

表外漢字字体表に合わせて、経済産業省では漢字コード規格「JIS X 0213」を04年2月に改正し、「遡」「遜」「逢」「謎」などを二点しんにゅうに変更した。また、法務省は04年9月に戸籍法施行規則を改正し、「遡」「遜」「逢」「謎」など二点しんにゅうの漢字を人名用漢字に追加した。各省庁では、常用漢字は一点しんにゅう、それ以外の漢字は二点しんにゅう、というのがコンセンサスとなっていった。

このコンセンサスが、常用漢字表の改正では逆に足かせとなった。「遡」「遜」「謎」では、二点しんにゅうの字体がJISや人名用漢字に採用されているため、もし新しい常用漢字に一点しんにゅうの「遡」「遜」「謎」を採用すると、JISや人名用漢字を再変更する必要が生じる。そこで漢字小委員会では、新たに常用漢字に追加する「遡」「遜」「謎」はJISや人名用漢字と同じ二点しんにゅうとし、一点しんにゅうの許容字体「遡」「遜」「謎」を角括弧に入れて付記する、という玉虫色の解決策を採ったのである。

本末転倒JISへの配慮

中学でどう教える

この玉虫色の解決策は、しかし、今後の漢字施策に大きな禍根を残す。最も大きな問題は、中学校における漢字教育だ。中学校では常用漢字を全て教えることになっており、したがって今後は、「違」は一点しんにゅうで「遡」は二点しんにゅう、という風に教え分けなければならない。しかも、今回の常用漢字表改正における字体差の問題は、しんにゅうだけでなく、似たような文字の「緒」と「賭」、「餌」と「飾」、「渉」と「捗」、「鎮」と「塡」、「喩」と「愉」など、かなり広範囲におよぶ。これらの字体差を教え分けるとなると、中学校など教育現場は間違いなく負担増となる。

また、漢字コード研究者としての筆者から見ても、今回の漢字小委員会の解決策は穏当を欠く。常用漢字表を漢字コードに合わせるのではなく、漢字コードの方を常用漢字表に合わせるべきだ。JISは従来、常用漢字表の全ての漢字を、丸括弧に入った康熙字典体まで全て扱えるようにしてきた。今回、角括弧に入った許容字体「遡」「遜」「謎」「餌」「餅」が常用漢字表に付記されるなら、それらは「遡」「遜」「謎」「餌」「餅」とは別の漢字コードで両方扱えるようにすべきであり、必要ならJISの改正もおこなうべきだ。それを怠って、常用漢字表の方をJISに合わせるなど、まったく本末転倒というものだ。

常用漢字表の改正案は、11月10日に国語分科会で審議された後、広く国民の意見を得るためパブリックレビューに付される予定だ。これを機に、常用漢字の字体はどうあるべきか、国民の議論が深まることを期待したい。

新しい常用漢字表で「しんにゅう」を含む57字

違遺逸（逸）運遠過還逆近遇迎遣込遮週述巡遵
進迅遂随（隨）髄（髄）逝遷選遡［遡］送遭造
速遜［遜］退逮達遅（遅）逐追通逓（逓）適迭
途逃透道導謎［謎］迫避辺（邊）返遍縫迷遊連

やすおか・こういち　1965年生まれ。京都大大学院工学研究科修了。京都大大型計算機センター助手を経て、2000年から現職。専門は人文情報学。共著に「文字符号の歴史」「文字コードの世界」など。